アレッサンドロ・スカルラッティ没後300年記念シンポジウム

※演奏つき

バロック・オペラの規範の確立と展開

2025年12月6日 土 13:00～19:00

早稲田大学小野記念講堂

早稲田大学早稲田キャンパス27号館 地下2階

入場無料

ご来場・ご参加にあたって、
あらかじめ左記QRコードもしくはURLよりご登録をお願いいたします。
尚、研究発表のみオンラインでもご視聴いただけます。
http://googleform/

コーディネーター **大河内文恵**（東京藝術大学附属高校・オペラ／音楽劇研究所招聘研究員）
司会 **石井道子**（早稲田大学・オペラ／音楽劇研究所所長）
コメンテーター **野田農**（早稲田大学・オペラ／音楽劇研究所員）

第1部 13:00～14:00
「特別講演」 **ディンコ・ファブリス**（所属先）

第2部 14:00～17:00
「イタリア」
辻昌宏（明治大学・オペラ／音楽劇研究所招聘研究員）
萩原里香（武蔵野音楽大学・オペラ／音楽劇研究所招聘研究員）
佐々木なおみ（ディスコルシ・ムジカーリ）
山田高誌（熊本大学）

演奏1

第3部 17:00～19:00
「各国受容」
森本頼子（名古屋音楽大学・オペラ／音楽劇研究所招聘研究員）
田中伸明（北里大学・オペラ／音楽劇研究所招聘研究員）
吉江秀和（杏林大学・オペラ／音楽劇研究所招聘研究員）

演奏2

★演奏協力
森川郁子（ソプラノ）　阪永珠水（ヴァイオリン）
森有美子（ソプラノ）　高橋弘治（チェロ）
上羽剛史（チェンバロ）

主催：早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所
後援：早稲田大学総合研究機構

オペラ／音楽劇研究所「バロック・オペラ」ワーキンググループ企画

2025 年に没後 300 年を迎えるアレッサンドロ・スカルラッティは、ナポリ楽派の祖、そして”古典オペラ”の構造のスタンダードを作った存在として知られる。一方、その生涯や作品の真価の探求はまだこれからの課題である。本シンポジウムでは、彼がオペラ作曲家として活動した 1679 年から 1721 年を概観するため、ローマで上演された最初のオペラ（1679）、イタリア古典歌曲集〈スミレ〉の原作で知られる中期の名作《ピッロとデメートリオ》（1694）、ほかヴェネツィアやナポリで上演された中高期の作品の分析から、彼の創作を様々な角度から明らかにするとともに、さらに彼がイギリス、ドイツ語圏、ロシアにおいてどのように受容されていたかを探る。

大河内文恵（バロック・オペラ WG 代表）

＜発表要旨＞

辻昌宏：《Gli equivoci nel sembiante》ローマ初演をめぐるスキャンダル

アレッサンドロ・スカルラッティのローマ・デビューはスキャンダルを巻き起こした。四旬節に彼の作品《Equivoci nell'sembiante 顔だちで取り違え》が上演され、教皇の逆鱗に触れたのだ。しかしその時彼はすでにスウェーデン女王クリスティーナの庇護下にあったために事なきを得た。その状況及び顛末を音楽とパトロンという観点から、そして作品がどんな内実を持ったものだったのかとあわせて紹介したい。

萩原里香：A.スカルラッティのオペラの再演をめぐる状況：《ピッロとデメートリオ》のシエーナ上演を対象に

アリア「スミレ」を含む《ピッロとデメートリオ》は、1694 年にナポリで初演されたのち、直後にローマで、数年のうちにミラノ、シエーナ、フィレンツェ、18 世紀に入ってからはロンドンでも再演された。上演ごとに若干の改変が行われているが、とりわけシエーナ上演では、唯一プロローグが設けられており、数ある再演のなかでも注目に値する。スカルラッティ作品のひとつの再演を対象に、地域色ならびにその地のパトロンとの関わりに焦点をあてる。

佐々木なおみ：創作の背景から見るオペラ《ミトリダーテ・エウパトーレ》

1707 年ヴェネツィア初演のオペラ《ミトリダーテ・エウパトーレ》（5 幕の悲劇）は、同年のオラトリオ《カイン》と並ぶスカルラッティの傑作である。しかし初演は不評と伝えられており、実際、彼は以後ヴェネツィアでの上演も、悲劇の作曲も行っていない。本発表では《ミトリダーテ》の創作から初演に至る背景を明らかにしつつ、その音楽的特質と初演失敗の要因について検討し、スカルラッティの後の活動に与えた影響についても考察する。

山田高誌：《貞節の勝利》(ナポリ、フィオレンティーニ劇場、1718)：初演劇場とジャンルに関わる”コンテクスト”からみて

スカルラッティ唯一の喜劇オペラとして近年各地で上演される《貞節の勝利》、喜劇役もすべて「トスカーナ語」で書かれている点で同時代ナポリの民間劇場において新しい趣向となっている。本発表ではこの作品が初演されたフィオレンティーニ劇場で上演された同時代の喜劇オペラの構造、喜劇役の役割と比較して、さらに献呈されたオーストリア副王ダウン伯爵の動向などから、この作品がどのように同時代のナポリの喜劇オペラと”同じ”で”異なって”いるのか、コンテクストとともに作品を見ていきたい。

森本頼子：18 世紀ロシアとナポリ楽派のつながり

ロシアで本格的なオペラ上演が始まったのは 1730 年代で、残念ながら、当時 A. スカルラッティのオペラが上演されたという記録は見当たらない。しかし、ロシアでは 18 世紀を通じて、ナポリ楽派の音楽家（アライヤ、トラエッタ、パイジェッロ、チマローザら）が宮廷に仕えたほか、諸劇場で彼らのオペラが上演された。本発表では、18 世紀ロシアの音楽界とナポリ楽派のつながりを整理し、ロシアのオペラ文化における影響力について再考する。

田中伸明：ドイツにおけるスカルラッティ受容とサンティーニ・コレクション

本発表は、ドイツ語圏におけるスカルラッティ受容の様相を、①1750 年頃までと②19 世紀以降の二期に分けて考察する。①ではハイニヒェンやクヴァンツの証言、ハッセによる改作に言及しつつ、ベルリンやアンスバッハの宮廷におけるオペラ上演実態を報告する。②ではツェルターとサンティーニの交流を軸に、宗教作品の受容を含めた 19 世紀の再評価の様相を明らかにする。

吉江秀和：《ピッロとデメートリオ（ピュロスとデメトリオス）》のロンドン上演について

A.スカルラッティの《ピッロとデメートリオ》が 1708 年にロンドンで上演された。これはスカルラッティの作品そのままではなく、ハイムが一部のアリアに曲をつけ、スウィニーが部分的に英語に翻訳したかたちで上演されたパスティッチョ・オペラであった。本発表では、このような形態がとられた理由を当時のロンドンでのイタリア・オペラ上演状況とともに確認し、この作品の上演の意図、どのような変更が加えられたのかを取り上げる。

演奏曲目（予定）

《顔だちで取り違え》　シンフォニア
クローリのレチタティーヴォとアリア
《グリゼルダ》　86 番のデュエット→
94 番の終曲
《ピッロとデメートリオ》　マリオ(S)のアリア「Ruggiadose, Odorese（露に濡れて香っている）」“Violette（スミレ）”(2 幕 2 場)
マリオ(S)のアリア「Con cento baci（100 のキスで）」(3 幕 11 場)

ソプラノ　森川郁子

ソプラノ　森有美子

ヴァイオリン　阪永珠水

チェロ　高橋弘治

チェンバロ　上羽剛史

早稲田大学 小野記念講堂 早稲田大学早稲田キャンパス 27 号館 地下 2 階

＜アクセス＞

JR 山手線／西武新宿線：高田馬場駅より徒歩 20 分 地下鉄東京メトロ東西線：早稲田駅 3b 出口より徒歩 5 分
東京さくらトラム（都電荒川線）：早稲田駅より徒歩 5 分 都営バス：早大正門前停留所より徒歩 1 分
※アクセスマップ https://www.wasedaalumni.jp/docs/waseda_map.pdf

〈問い合わせ先〉scarlatti.baroque.opera@gmail.com／A. Scarlatti Project@「バロック・オペラ」WG（代表：大河内文恵）